

平成18年ごろまで、当家の8畳二間にすべての人形を展示していました。しかし、その茅葺き屋根の母屋は平成21年に取り壊されたため、昨年からは現存する部屋を会場に、毎年入れ替えて少しずつ公開することにしました。

今年はおだいら「大内裏 殿」「大内裏 姫」
ごせちまい
一對と「五節舞人形」(写真左側)を展示します。

五節舞人形

先に製作されたのは五体の「五節舞人形」です。大正4年から6年にかけて作られました。五節舞とは雅楽の一種で、唯一女性が演じる舞です。天武天皇の時代に創始された舞で、宮中儀式の天皇即位式や大



左が今年展示の人形、右が押し絵人形



平成9年の展示の様子(合成) 母屋の8畳二間をめいっぱい使って展示していました



嘗祭、新嘗祭で舞われますが、大正天皇の即位式まで途絶えていました。

一体ずつ収納する箱には「御即位式御行事 五節舞人形」と記され、大正4年に行われた大正天皇即位式で奉納された五節舞を参考にしたと考えられます。押し絵人形は明治27年から明治29年ごろまでに多くが作られたようなので、雪章はこれを機に20年近く離れていた人形作りを再開したようです。

さらに、これまで作ってきた押し絵人形ではなく、本格的な衣装人形に取り組んだ最初の作品です。また箱の蓋の裏面には、最初の(元の)頭

は山形の人形師によるものでしたが、大正7年改めて東京十軒店 玉貞に注文して改修したことが記載されています。

後ろ姿をしてみると舞姫の裳(女子の正装の時に袴の上に腰部の後方だけにまとうもの)には鳳凰や松、青海波が一体ごとに意匠を変え手描き



されています。画家としての雪章の本領が、隠れた部分に見てとれます。衣装の美しさとともに、手描きならではの違いにもご注目ください。

平成9年当時の写真では五体の舞姫は横一列に並び、箱にはその順番も記されています。しかし、このたびの展示では段を広くとり、雅楽本来の正方形の舞台に檜扇(ひおうぎ)を翻して舞う姿を再現しました。雪章は一体ずつ角度を変えて台座に配しています。様々な方向から舞姫を見ることができるよう、また舞い踊る姫たちの動きを表現しようとしたのかもしれませんが。

じっけんだな
東京十軒店 玉貞

東京日本橋に「十軒店跡」を示す石碑が残っている。三月の雛人形、五月の武者人形など節句用品を商う店が軒を連ねて時季には盛大な市が立った。多くの名工がいることで知られたが関東大震災と戦災により多くの店が焼失、最後まで残った玉貞人形店も平成10年代に閉店した。

